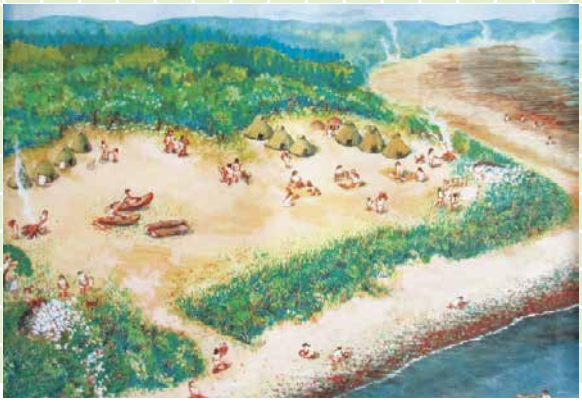
発掘調査のようす



縄文時代のむらの想像図

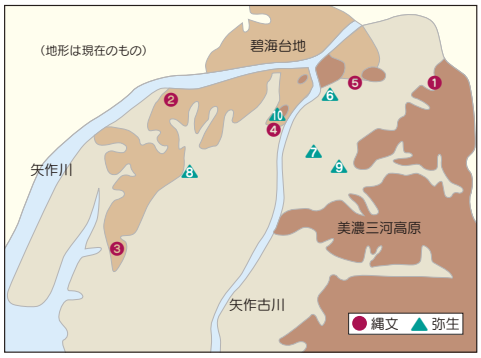
枯木宮貝塚と縄文人 ―縄文時代の寺津―

貝塚と縄文人の生活

西尾市内の碧海台地の端には、約6,000年前から約3,000年前の縄文時代に、人々がむらをつくり住んでいたことを示す数々の遺跡があります。そのうちの一つとして、標高6mから7mにある寺津中学校の敷地の東側に、今から約3,000年前の集落跡である「枯木宮貝塚遺跡」があります。1949年より約30年間に8回にわたる発掘調査が行われ、県の史跡に指定されました。

貝塚から出土する貝殻は、約50種類をかぞえ、そのおもなものは、ハマグリ・マガキ・アサリなどです。このことから、当時、貝塚の前には、浅い海が広がり、海岸の近くには、広い砂浜があったと考えられます。魚類では、クロダイ・マダイ・スズキ・サバ・フグの順に出土量が多く、中にはどう猛なアオザメの骨も出土しています。ほ乳類では、シカ、イノシシの骨が多く出土しています。魚は、骨で作られたもりや石のおもりを付けた網を使い、動物は、石で作られた矢じりと木製の弓を使い捕獲されていました。

土器については、食べ物の煮炊きに使われた無文の深鉢や文様を付けた保存用の鉢などが数多く出土しています。その文様は、縄や巻貝を転がして付けたり棒や割竹を使って描かれたりしています。



縄文・弥生遺跡の分布図

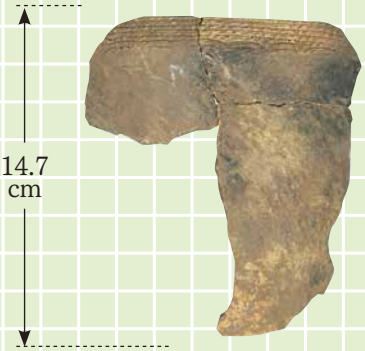
縄文時代の集落は，台地や山地の端にある。弥生時代になると集落が稲作の水の引きやすい低地へと移る。

位置	遺跡名	推定年代	立地	出土遺物
1	釜田貝塚	6,000年前	高原端	貝がら，土器片，石器
2	八王子貝塚	3,500年前	台地端	貝がら，イノシシ・シカ・クジラの骨，石斧，矢じり，石棒，石皿，土器，土偶，骨角器，人骨
3	枯木宮貝塚	3,000年前	台地端	貝がら，イノシシ・シカ・犬の骨，石斧，矢じり，おもり，土器，骨角器，土偶，土版，人骨
7	岡島遺跡	2,000年前	低　地	石斧，土器（つぼ，かめ，高坏），土錘，木製品，銅鐸形土製品
8	住崎遺跡	2,000年前	低　地	石斧，土器（つぼ，台付かめ，高坏），木製品，銅鐸形土・石製品
10	熊子山遺跡	2,000年前	台　地	貝がら，土器，石錘，石鏃，土製紡錘車
4 新御堂貝塚	5 五砂山遺跡	6 小島銅鐸出土地	9 毘沙門遺跡	

市内の主な縄文・弥生の遺跡

石の矢じり

鹿の骨製の笛



縄文土器

生活で必要な道具は，石や骨，角などで作られていた。

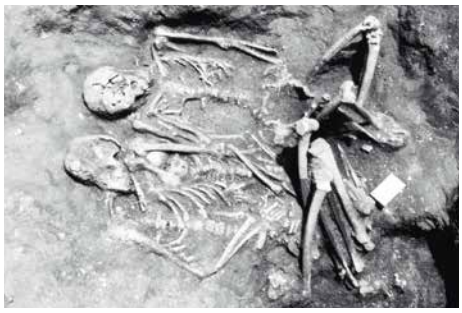
西尾市資料館蔵

遺跡から出土した人骨

これまでの発掘調査で、25体の埋葬人骨と２基の土器棺墓が出土しています。人骨は、大人が16体、子どもが６体、年齢のわからないものが３体でした。住居と埋葬跡が、３か所で比較的集中して見られることから、家族単位の住居と墓域があったと思われます。

人骨の多くは、あおむけの状態で体を折り曲げて埋葬（屈葬）されていました。中には、二人の成年男子の間に一人の子どもがいっしょに埋葬（三体合葬）されているものや手足の骨を四角形に組み、その中に肋骨などを入れ、四すみに頭の骨をのせて埋葬（盤状集積葬）されているものといった三河湾岸特有の埋葬方法が見つかりました。また、生前に犬歯などを抜いた人骨や切歯などに切り込みをつけた人骨もあり、この地方の特異な風習を思わせるものもあります。

全国各地で出土した人骨を調べてみると、縄文人は、現代人よりも背が低く、およそ150㎝後半であったと考えられています。また、がんじょうな体つきであったことや食事が砂まじりの水で調理されていたと考えられ、歯の減りぐあいが現代人の２倍くらいありました。むし歯がなく、歯石もほとんど残っていませんでした。さらに、犬だけが人間と同様にていねいに埋葬されていました。狩猟生活が中心であったこの時代、飼い犬が家族の一員として大切にされていたと考えられています。



三体が一緒に埋葬された人骨 三体合葬
（枯木宮貝塚出土・寺津町）
埋葬する時に、手足をさまざまな形に折り曲げる屈葬が多く見られる。

手足の骨を四角形に組んだ人骨 盤状集積葬
（枯木宮貝塚出土・寺津町）西尾市資料館蔵

岡島遺跡からの出土品
岡島弥生資料館（三和小学校内）に保管されている。

岡島遺跡と稲作による世の中の変化　―弥生時代の東部―

岡島での古代の人々の暮らし

岡島遺跡のある岡島町と江原町の付近は、1945年の三河地震によって田畑に高低差が生じたため、農業用水の排水機能が著しく低下しました。そのため、1953年に排水能力を高める床下げ作業が行われ、このときに三和中学校（現在の東部中学校）歴史クラブの手によって大量の土器片が採集され、ここに遺跡があることがわかりました。発見された土器類の多くは、弥生時代中期以降のものであり、当時の人々が、この辺りの少し高い場所に集落をつくり、生活していたと考えられます。

岡島遺跡は、矢作川下流域を代表する弥生時代の集落跡です。出土品としては、かめ・壺・高杯といった弥生時代を代表する土器が多く見つかっています。石斧・石包丁・石鏃などの石器類も出土していますが、出土量はそれほど多くありません。また、弥生時代に特徴的な高床倉庫は見つかっていませんが、当時の人々が暮らしたたて穴住居の跡や当時の墓である方形周溝墓、さらには大型の鉢や壺を上下に重ねた土器棺墓が見つかっています。

岡島遺跡では、これまで約32,800㎡におよぶ調査が行われてきましたが、これは推定される総面積の４分の１にもみたないものです。まだ多くの遺物や遺構が土の中に眠っています。

墓の周りに溝をめぐらした方形周溝墓の跡（岡島町）
公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

八ツ面山から見た岡島遺跡周辺（2010年ころ）
国道23号の工事にともなう調査で岡島遺跡の様子がわかってきた。矢印は、遺跡の中心と推測されている。

岡島遺跡から見つかった炭化米
岡島弥生資料館（三和小学校内）蔵

弥生時代の環濠集落のイメージ
住居を囲むように濠をめぐらせてある。

弥生時代の暮らしと戦い

岡島遺跡からは炭化米が見つかっています。今のところ水田跡などの稲作に関わる遺構は見つかっていませんが、この時代の人々にとって米が重要な食料となってきたことがうかがわれます。

稲作によって貧富の差が生まれるようになると、土地や財産をめぐって争いがおこるようになりました。こうした争いに備えるために、むらの周囲に濠をめぐらす環濠集落が生まれました。西尾市内の遺跡では、熊子山遺跡（八ツ面町）や中根山遺跡（吉良町岡山）で環濠が見つかっています。岡島遺跡でも環濠と思われる溝は見つかっているものの、詳しい全体像はわかっていません。

岡島周辺は、弥生時代後期になるとしだいに生活に向かない環境になってきたと考えられています。そのため、岡島のむらは、それ以前に比べて縮小していきます。しかし、その後の古墳時代以降も細々と人々の生活が続いていました。

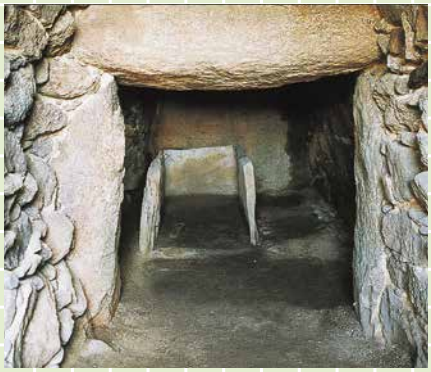
岡島遺跡の発掘

岡島遺跡は、1953年の遺跡発見以降、断続的に調査が行われてきました。

近年では、2013年１月から３月にかけて1,000㎡を超える大規模な発掘調査が行われ、たて穴住居跡とあわせて、環濠と思われる溝が発見されました（写真の白色の破線部）。環濠の発見は、西尾市の遺跡では2005年に江尻遺跡（西幡豆町）で発見されて以来で、今後、周囲の調査が進むことで、岡島遺跡の全体像が見えてくることが期待できます。

2013年の調査の様子（岡島町）
西尾市文化振興課（現文化財課）が中心となり、大規模な調査が行われた。

現在のとうてい山古墳（東幡豆町）



とうてい山古墳の内部の様子

古墳と大和政権の広がり　―古墳時代の幡豆―

尊い人が葬られた墓

西尾市にある古墳は、美濃三河高原から続く山並みにあたる西尾市の東部や南部に集中しています。古墳の多くは、被葬者がわかっていません。

幡豆地区に残る古墳では、６世紀後半に造られたとされる「とうてい山古墳」が有名です。この古墳は、「とうて（遠手）山古墳」ともいわれ、三ヶ根山系から南に延びる丘陵の先端にあります。この丘陵には、他にも古墳が数基あります。「とうてい山」とは、「尊い人が葬られた山」という地元の言い伝えのなまりであるという説もあります。

とうてい山古墳の石室には、「佐久石」という佐久島産の砂岩で造られた石棺があります。砂岩は、砂が固まった石のため、加工しやすいのが特徴です。

標高50mほどのところにあるとうてい山古墳に佐久島産の石が使われているということから、佐久島から石を運ぶことができるほどの権力をもった地方の豪族がこの地にいたと推測されます。

古墳の分布図

位置	推定時代	古墳名	出土遺物
❶	4世紀半ば	吉良八幡山古墳	
❷	5世紀前半	正法寺古墳	埴輪　須恵器
❸	5世紀後半	中之郷古墳	鏡　馬具 埴輪
❹	6世紀後半	とうてい山古墳	馬具　須恵器
❺	6世紀半ば～ 7世紀後半	羽角山古墳群	馬具　須恵器
❻	7世紀前半	佐久島古墳群	須恵器
❼	7世紀後半	西川原古墳	帯金具 暗文土師器
❽		刈宿古墳群	須恵器

市内の主な古墳

帯金具（ベルトのバックル）
現在のベルトのバックルと形が似ている。
西尾市教育委員会蔵

暗文土師器
放射線状の文様が記されている。
西尾市教育委員会蔵

古墳から出土した副葬品

古墳時代末ごろには、日本を一つにしようとする動きが広がります。地方の豪族の墓も薄葬令※という法律により造られなくなってきました。しかし、一方では、この時期にも古墳が造られています。７世紀後半にできたとされる西川原古墳は、そうした時代に造られました。1999年に調査された西川原古墳からは、帯金具（ベルトのバックル）と暗文土師器が出土しました。

帯金具は、刀剣を身につけるために使われており、身分の高い人物のみが身につけることのできた服飾品と考えられています。また、暗文土師器は、「暗文」と呼ばれる文様を放射状に施してあり、金属器の光沢や質感を再現しています。出土した暗文土師器は、近畿地方で作られたものであることがわかっています。これらの副葬品から、被葬者は、近畿地方にゆかりのある大和政権に関係する人物ではないかと推測されます。

※薄葬令とは，646年に身分に応じて古墳の規模などを制限した天皇の命令のこと。

羽角山古墳群

最明寺山から万灯山の丘陵上に６世紀半ばから７世紀後半にかけて造られた約100基の古墳群があります。半数近くが牧草地や工場用地ができたことによって消滅しましたが，12基については発掘調査が行われました。住崎１号墳・高根１号墳・高根３号墳は，デンソー工場敷地内に移築され，三和小学校にも五釜１号墳が移築されています。また，上羽角町の三ノ山古墳は，６世紀後半に造られた円墳で，石室の保存状態がよく，石室内を見学することができます。

三ノ山古墳（上羽角町）

八ツ面山全景

現存する雲母採掘跡（八ツ面町）
現在は危険防止のため、ふたがかぶせてある。

雲母と律令政治　―奈良・平安時代の鶴城―

雲母の献上

645年、中大兄皇子や中臣（藤原）鎌足らが中心となって、大化の改新がはじまりました。大化の改新後、御（三）河の国（西三河）と穂の国（東三河）を一つにあわせて三河国と呼ぶようになったといわれますが、それらが大和政権の支配を受けるのは、8世紀半ば過ぎと考えられています。

この地方が、文献に最初にあらわれるのは、『続日本紀』に記されている

「大和参河をして並びに雲母を献らしむ」

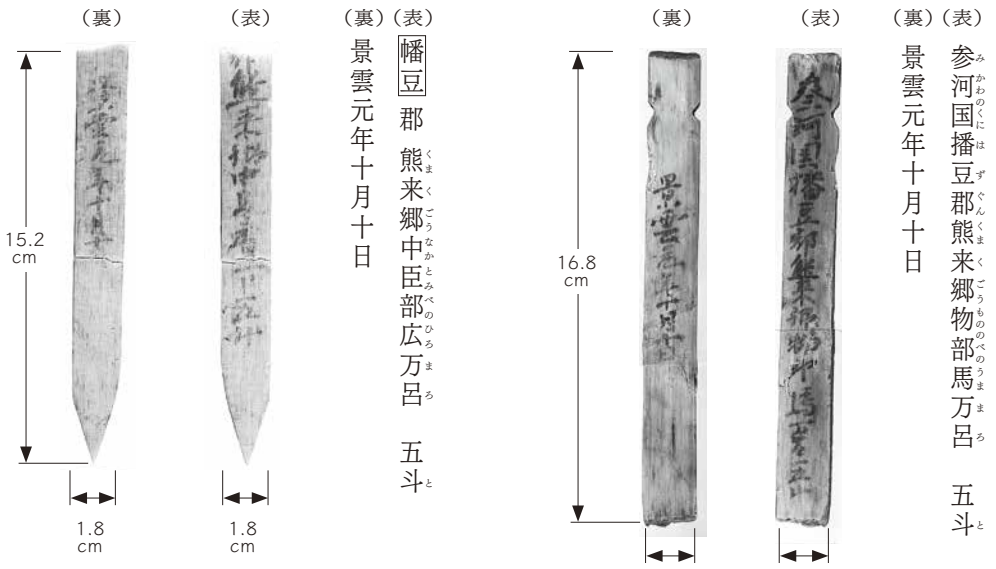
という713年の記録です。古代から雲母の産出が行われ、この雲母を当時の税である「調」として納めました。献上したのは、古くは雲母山・吉良山といわれた八ツ面山付近の村々であったと推定されています。雲母は、古くは薬用として、後に、紙すきの装飾物として使用されていたようです。

久麻久神社本殿（八ツ面町）
国の重要文化財である。

雲母山碑（八ツ面町）
雲母山碑の柱の左上に石碑が見える。

江戸時代には、雲母は、西尾藩の特産品となり、盛んに採掘されました。久麻久神社拝殿南には「雲母山碑」が建てられ、江戸時代の雲母採掘の様子が刻まれています。

1899年の落盤事故を機に、採掘は終わり、その跡は、1931年の小学生の転落事故をきっかけに地元の青年団によってほとんどが埋め立てられました。



西隆寺跡出土木簡
奈良文化財研究所蔵

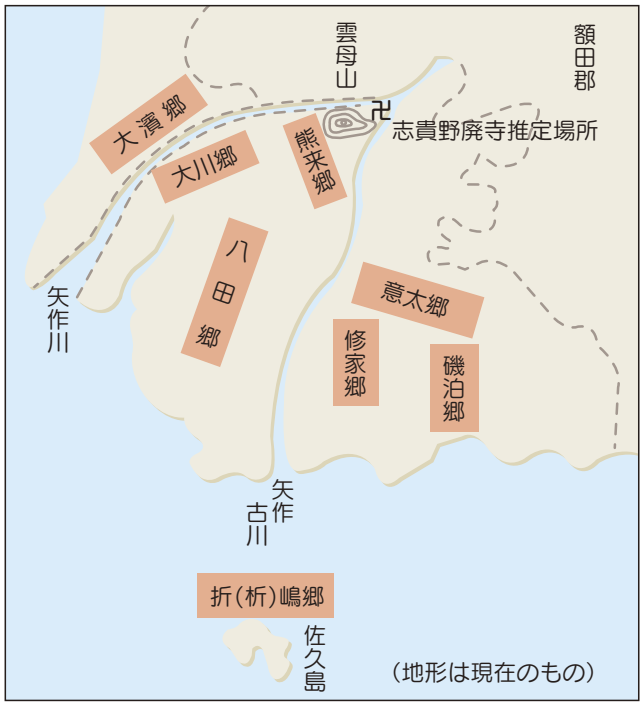
木簡に記される熊来郷

奈良時代、三河国に八郡があり、西尾の地は、主に幡豆郡にありました（当時の地方の単位　国－郡－郷）。平安時代に書かれた『和名抄』によると、幡豆郡には、八郷（熊来・八田・意太・磯泊・大川・大濱・折(析)嶋・修家）があったと記されています。

八郷のうち、八ツ面山を中心とする一帯を熊来郷といいました。奈良の西隆寺跡から発掘された木簡（木の荷札）には、767年10月、この熊来郷に住んでいた物部馬万呂や中臣部広麻呂らが、白米５斗を西隆寺の造営費用として送ったことが書かれています。この木簡から、この郷の存在がわかり、熊子（熊味の北部分）の地名と久麻久神社の存在から、八ツ面山を中心とする地域とされました。

また、藤原宮跡で出土した木簡の中に「矢田」と記されるものが見つかっており、現在の矢田町周辺と考えられる矢田里（八田郷）の白髪部小麻呂が、貢ぎ物を都に送ったことも明らかになっています。

近年行われた発掘調査では、熊来郷と考えられる志貴野町・志籠谷町・中原町・八ツ面町内に、７世紀後半から９世紀のたて穴住居や堀立柱建物が、200棟も確認され、その集落の様子が想像できるようになりました。



幡豆郡にあった八郷

実相寺釈迦堂（上町）
安土桃山時代の1576年に徳川家康の重臣鳥居元忠により、現在の静岡県浜松市から古堂を移築したものという。

実相寺開山聖一国師像

中世吉良氏と実相寺　―鎌倉・室町時代の鶴城・吉良―

中世吉良氏のおこり

平安時代後期、各地に武士が台頭し、やがて鎌倉幕府がひらかれ、1192年には源頼朝が征夷大将軍になりました。1221（承久３）年の承久の乱の後、足利義氏が、三河国の守護になり、吉良荘の地頭を兼ねました。足利氏は、源氏の名門で、義氏の母は、北条政子の妹にあたり、鎌倉の御家人の中で高い地位にありました。そして、長男長氏に西条城、三男義継に東条城を与え、吉良荘を東西から守る体制をとったと伝えられます。かれらは、室町時代のころより荘園名にちなみ吉良氏を名乗りました。実相寺は、吉良氏を保護者にもつ有力な禅宗寺院として繁栄し、西尾の中世文化を代表しています。

実相寺境内中央には釈迦堂があり、釈迦三尊像が安置されています。この仏像の体の中から見つかった文書によって、1362年に吉良満貞や僧侶を始め、当時の人々が平和への祈りをこめて仏像を作ったことがわかります。

八葉宝鐸型梵鐘
中国の影響を強く受けた珍しい形の鐘である。

実相寺のつり鐘伝説

伝説１　実相寺２代目住職応通禅師は、ある時、座禅中に立ち上がり、弟子たちを呼び寄せ、「唐の経山寺が大火事だ、加勢せよ。」と言って、村人の助けも得て、実相寺の堂塔に水をまいた。それから５年後、唐の経山寺の使者がきて、出火のときの助勢の礼をのべ、焼け残った大塔の宝鐘を贈ると言った。その後、禅師が裏庭の井戸を掘ると、つり鐘が埋まっていたという。

伝説２　1346年、４代目住職仏海禅師の説法を聞いた小間ケ淵に住む竜人が「説法のおかげで悟りを得られました」とお礼に寄進した。

東条城跡（吉良町駮馬）
藤波畷の戦い（吉良町寺嶋・瀬戸）
吉良方の武将富永伴五郎忠元は藤波畷で討ち死にしました。

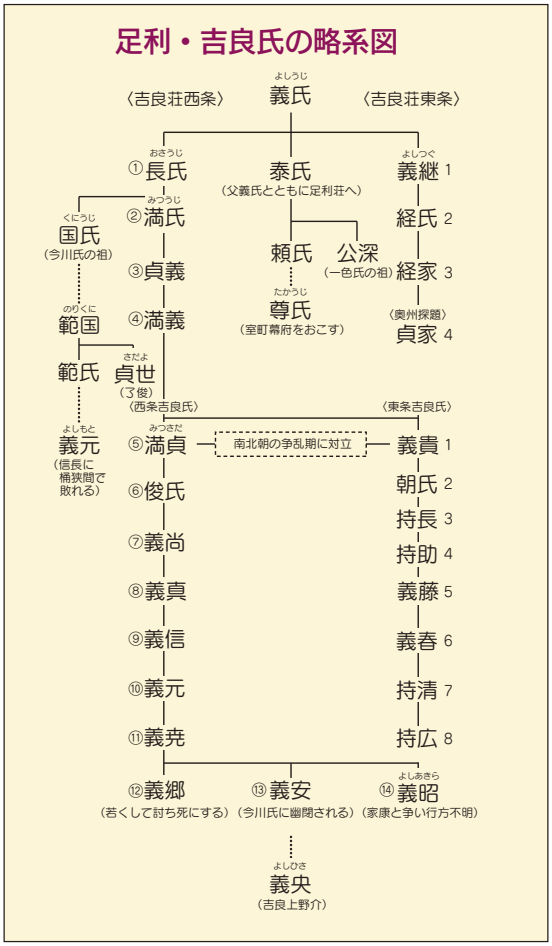
中世吉良氏の移りかわり

南北朝時代から室町時代にかけて、「東西吉良氏の仲、つねによろしからず」と東西吉良氏は対立していたといわれます。1467年の応仁の乱以後、室町幕府の力が弱まるにつれて、将軍の一門である両吉良氏も衰えていきました。16世紀半ばになると今川勢は西三河に進出し、西条城（西尾城）を攻めました。

1560年、今川義元は軍を三河から尾張に進めました。尾張を攻撃しようとしたとき、織田信長が、これを急襲し、義元を討ちました（桶狭間の戦い）。このころ、信長は、実相寺が今川氏の吉良支配の拠点の一つであったため、この寺を攻めてことごとく焼失させたと伝えられています。

桶狭間の戦いの後、松平元康（徳川家康）が、三河統一をはかり吉良に侵攻してきます。中世吉良氏最後の当主義昭は、藤波畷の戦いで松平方に敗れました。義昭は、東条城を出ることになります。しかし、足利将軍家一門だった吉良氏への処置は寛大でした。

1563年、三河では浄土真宗（一向宗）の門徒による一向一揆がおこりました。一向宗門徒と家康が戦う中、吉良氏を復興しようとした義昭もこの機に家康に反抗しましたが、翌年には再度家康に敗れました。そして、約340年間にわたって吉良荘を治めた吉良氏は没落しました。



中之郷古墳　（西幡豆町）
この古墳の南西の隣地一帯が欠城のあったところといわれている。

寺部城跡本丸　（寺部町）
江戸時代になり、廃城となった。

幡豆小笠原氏と寺部城　ー戦国時代の幡豆ー

幡豆小笠原氏と戦国時代

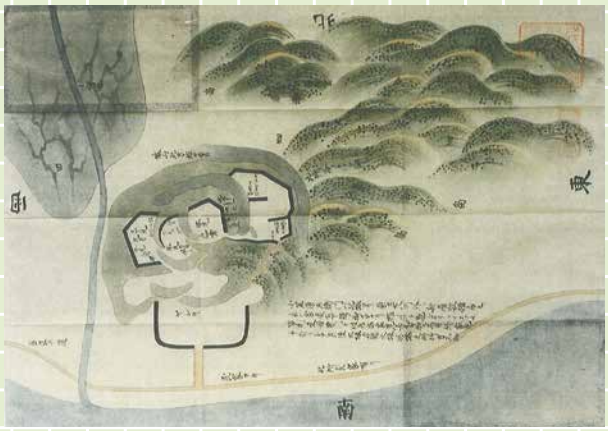
鎌倉時代に幡豆の地にやってきた小笠原氏を幡豆小笠原氏と呼んでいます。

戦国時代には、欠城の小笠原氏（摂津守家）と寺部城の小笠原氏（安芸守家）の二系統がありました。摂津守家と安芸守家で縁組をするなど、良好な関係を保っていました。戦国時代、幡豆小笠原氏は、今川氏の勢力下にあり、松平元康（徳川家康）と戦ったという「走付の戦い」が言い伝えられています。1564年に、元康が、吉良義昭を敗ると松平氏の配下となりました。

徳川氏に従った幡豆小笠原氏は、三方ヶ原の戦い、長篠の戦い、小田原城の戦いなどで活躍をし、功績を上げました。また、家康の関東移封とともに幡豆小笠原氏も関東に移っていきます。その後、徳川氏に従い、関ヶ原の戦いにも東軍として参加をしました。関ヶ原の戦いでは、師崎（毛呂崎）に配置され、石田三成方の水軍の動きを押さえる役割を果たしました。摂津守家の本家は絶えますが別家が1190石の旗本として、また、安芸守家は2500石の旗本として、江戸時代末まで続きました。安芸守家は幡豆の地で培った地の利（水の利）を生かし、航海術にすぐれ、船手頭になりました。その高い技術を生かし、1593年に小笠原諸島を発見したという説もあります。

幡豆小笠原氏の転戦地
徳川家の家臣として、多くの戦いに参加し、功績を挙げた。
『幡豆町史 本文編１ 原始・古代・中世』

関東移封と幡豆小笠原氏
家康とともに関東に移り、江戸時代になると旗本になる。
『幡豆町史 本文編１ 原始・古代・中世』



諸国古城之図「三河　寺部」
海に面し、土塁に囲まれている。当時の寺部城の様子を見ることができる。
広島市立中央図書館浅野文庫蔵

安泰寺　（西幡豆町）
境内には家康が鎧をかけたとされる松があったが、伊勢湾台風によって倒れた。

寺部城と安泰寺

寺部城は、幡豆小笠原氏のうちの安芸守家の城でした。本丸からは、三河湾と梶島・佐久島などの島々、渥美半島と知多半島などを一望でき、海上交通の要衝を押さえたと考えられます。また、眼下には、寺部港を臨む位置にあります。

地元で「城山」と呼ばれる丘陵の先端頂上に本丸、西に一段低く二之丸があります。三之丸は、もう一段低いところにあります。南側には、見張りや見回りのための道が幾本もあります。また、長さ30mほどの土塁も残っています。

安泰寺は、幡豆小笠原氏の菩提寺として、欠城主の小笠原長重によって1513年に創建された曹洞宗の寺院です。寺には、椰子実水飲と金紫銅之水容の二品があります。付属する袋は、1712年に幡豆の領主松平為政が新調したものです。三ツ葉葵の紋付小箱の蓋裏の朱書きによると、二品が、東照神君（徳川家康）の遺品であり、椰子実は、中国伝来のものであること、水滴（水容）は、この寺伝来のものであると記されています。

幡豆小笠原氏の位牌
幕のところにある小笠原家の家紋「三階菱」は、武田氏の家紋である「四つ割菱」（❖）との関係を表している。
安泰寺蔵

手前左に椰子実水飲、右に金紫銅水容
小箱と袋に徳川家の家紋の「三ツ葉葵」が見られる。
安泰寺蔵

再建された本丸丑寅櫓（錦城町）
本丸の北東のすみに建てられたやぐらで、1996年に再建された。

再建された二之丸丑寅櫓（錦城町）
二之丸の北東すみに建てられたやぐらで、2020年に再建された。

城下町西尾　―江戸時代の西尾―

城下町のようす

1555年、今川氏が吉良氏を攻めたとき、今川義元は、西条城を西尾城と呼びました。その後、田中吉政のころに城郭は拡張され、井伊直之（のち直好）によって総構え（城下町も含め外周を堀や土塁で囲い込んだもの）の城下町が完成し、西尾が発展するもとになりました。

江戸時代のはじめには、２万石から３万５千石の大名が配され、譜代大名がいれかわりこの城下を治めました。1764年には６万石の大給松平氏が藩主になり、明治時代に版籍奉還が行われるまで続きました。

西尾城は、城の西と南が沼地であったため、城下町は、北東の台地に向かってつくられました。二之丸に三重四階建ての天守がそびえ、外堀に囲まれた城下町には、武家屋敷や町屋が混在していました。武家屋敷は、現在の錦城町や大給町、鶴ヶ崎町、馬場町、足軽屋敷は、矢場町から和泉町にかけて配置されました。新屋敷は、参勤交代の制度がゆるめられたあとに江戸詰の藩士が西尾に戻り、1863年に新しい武家屋敷がつくられて名付けられた地名です。また、商人の町は、表六ヶ町といわれる中町、天王町、肴町、本町、須田町、幸町（横町）に広がっていました。

1872年に西尾城が廃城となりましたが、現在は、歴史公園として整備されています。

城主	酒井		田中	本多	松平	本多	鳥山 牛之助 鈴木 八右衛門	太田	鳥山 牛之助 鈴木 八右衛門	井伊	増山		土井
	正親	重忠	吉政	康俊	成重	俊次		資宗		直之	正利	正弥	利長
西尾入城期	1561	1576	1595	1601	1617	1621		1638		1645	1659	1662	1663
主な業績・エピソード	長篠の戦いに参加した。徳川家康の家臣。	関ヶ原の戦いに参加した。正親の子。	城郭と城下町の基礎を築いた。豊臣秀吉の家臣。	大坂冬の陣と夏の陣で功績を上げた。	大坂夏の陣の功績で西尾城に入る。大給松平氏一族。	徳川家光の参内のお供をした。康俊の子。	幕府から城代に任じられた。西尾城主が不在。	江戸城を築城した太田道灌の子孫。	幕府から城代に任じられた。西尾城主が不在。	西尾城の総構えと西尾城の五門が完成。	四代将軍家綱の信任が厚かった。	正利の子。10歳で父の遺領を継いだ。	御剱八幡宮の社殿を再建した。

城下町の名残（順海町）
この道を順海和尚が開いたため、順海町と呼ぶようになったといわれる。

盛厳寺（馬場町）
大給松平家の菩提所である。大給松平４代目乗全の墓がある。乗全は、井伊直弼が暗殺された後、西尾にもどり、1870年に亡くなった。

西尾藩士のくらし

西尾藩の家臣団の定数は、約1,200人でした。そのうちの約３割にあたる番組足軽は、給料が平均５石３人扶持（11石）で、月に２俵から３俵の米を支給される下級武士でした。１石というのは、大人一人が１年間に食べる量に相当します。家族や使用人が食べる分を除いて、売って生活費にしましたが、現在のお金に換算しても大した金額にならなかったことが想像されます。かれらは、この安い給料で家族を養い、武士らしさも保たねばなりませんでした。

武士としての日常生活には制限が多く、祭礼は数少ない楽しみの一つでした。数人で祭り見物に出て酒を飲んだり、余興の相撲に加わったり、芝居や狂言を見物したりしました。しかし、武士の威厳を損なう行為への罰は厳しく、中にはきのこ採りに行った帰り道に通りすがりの男女に悪口などを言い、藩の裁判で謹慎（押し込め）を言い渡された者もいました。

農民に対しては、幕府が1649年に出したと伝えられる「百姓の生活心得」が有名ですが、大給松平氏も1765年に18項目からなる「覚」を出し、領民に対してきまりを示しました。そこには、年貢米の割り付け方法や他領の者との縁組方法など、農民の生活に関するきまりや禁止事項が定められていました。

土井			三浦		大給松平				
利意	利庸	利信	義理	明次	乗佑	乗完	乗寛	乗全	乗秩
1681	1724	1734	1747	1756	1764	1769	1793	1839	1862
利長の子。矢作古川を改修した。	いねの病害発生の対策に苦心した。	財政立て直しや新実新田開発に努力。	平坂港の維持と新田開発。	在城わずかで勝山（岡山）に移る。義理の養子。	朝鮮通信使の接待役をする。	老中として寛政の改革に貢献する。寺社奉行・京都所司代・老中を務める。	江戸の屋敷が火災にあう。藩財政の立て直し。寺社奉行・京都所司代・老中を務める。	大老井伊直弼の時に老中として活躍。	版籍奉還の時、藩知事に命ぜられた。

江戸時代初期の地形

新田開発の様子（数字は開発年を示す）

現在の航空写真

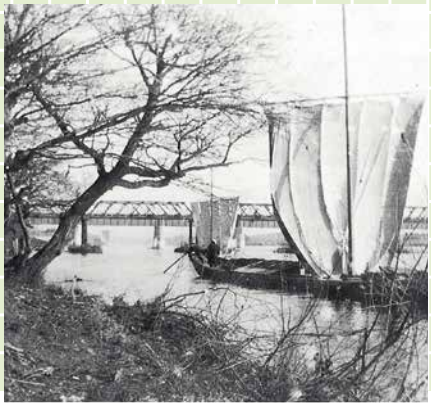
矢作川河口の新田開発と平坂港　―江戸時代の平坂―

町人による新田の開発

1605年、徳川家康の命により、藤井村（安城市）から米津間に矢作新川が開かれると、河口近くの入り海は、上流から流れてくる土砂のために、だんだん遠浅になってきました。これを利用し、江戸時代から新田が次々と開発されました。しかし、新田開発には多くの費用がかかるので、大商人が、幕府から開発許可を得て行われることが多く、西尾の新田開発の多くは、町人によって行われました。

矢作川周辺の新田は、市川彦三郎（平坂）の市川新田、新実惣右衛門（平坂）の新実新田、三浦屋五郎左衛門（江戸）によって開発された五郎左衛門新田（1750年に西小椰新田と改称）、小栗半七（半田）の小栗新田、奥田正香（名古屋）らによる奥田新田など、当時、多大な資金を投資した町人らの名前が多く残っています。海抜ゼロメートル以下にある干拓された新田は、河川沿岸の低地以上に水害や排水不良に苦しめられました。1912年に完成した南奥田新田は、暴風雨のたびに何度も堤防が壊され、その復旧に多大な費用がかかりました。その後も相次ぐ災害にみまわれましたが、農民の努力によって今日の姿を見ることができます。

堤防の上から見た現在の西小椰新田（西小椰町）
海抜ゼロメートル以下の新田である。



矢作川を上下した川船（米津町）
昭和時代になって姿を消した。

現在の平坂港の入江（平坂町）

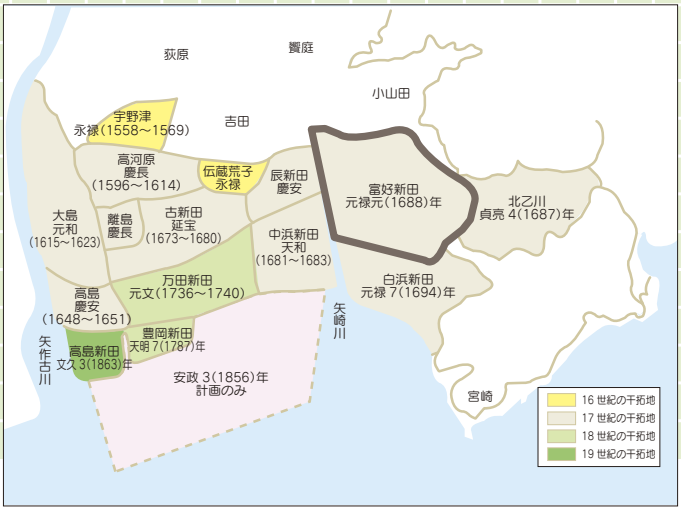
平坂港の発展と衰退

1605年に現在の矢作川に流路が変わると、川船による矢作川の水運は盛んになりました。上流からの年貢米は、川船で下り、平坂港から江戸へと運ばれました。三河で織られた木綿も平坂港から江戸に送られました。西尾では、仲買商として矢田の杉浦茂左衛門と買継商として横町（現在の幸町）の深谷半左衛門らが活躍しました。また、三河湾沿岸、大浜（碧南市）、饗庭（吉良町）、成岩（半田市）で生産された塩は、平坂や大浜から川船で途中の岡崎にある塩座を経由し、馬で足助（豊田市）の塩問屋まで送られ、さらに信州（長野県）まで運ばれていました。これが「塩の道」で、三河と信州を結ぶ重要な交通路でした。矢作川の下流では、新田でとれた米を使った酒の醸造も行われ、大浜港や平坂港から江戸に運ばれました。

明治時代になると、矢作川を上る荷物は、石灰・酒・溜り・セメント・塗物などでした。下る荷物は、米・材木・竹・石・炭などでした。しかし、昭和時代に入ると陸上輸送が中心となり、川船の需要は急激に減っていきました。

中畑八幡社にある常夜灯（中畑町）
矢印のところに「村中海上安全」と書かれている。

信州へ続く塩の道（茶色）とこれを結ぶ川船の道（青色）
三河湾沿岸で生産された塩は、矢作川を利用して上流に運ばれた。



真正寺にある富好新田碑文（吉良町富好新田）
富好新田の干拓経緯を後世に伝えている。

吉良町南部の新田開発
16世紀に宇野津・伝蔵荒子が開かれ，17世紀を中心に干拓が進められた。

海岸部の新田開発と製塩業　―江戸時代の吉良―

吉良義央と新田開発

吉良の新田開発は、1339年に足利尊氏が目代（代官）に命じて開発させたといわれる饗庭七郷など、はじめのころは、武士の命による新田開発でした。現在の吉良町南部では、戦国時代から江戸時代の初期にかけて大規模な新田開発が相次いで行われ、18世紀には高島新田を除いて、ほぼ現在の海岸線となりました。

その中でも、富好新田は、吉良義央の命令により、矢崎川の東側に干拓された新田です。富好新田の干拓には、義央の妻富子の病気と深いかかわりがあるといわれます。長い間、重い眼病に悩まされていた富子は、七面天女に病気の治癒を祈願するため、身延山久遠寺（山梨県）を訪れます。そして、眼病の全快を願うとともに、実現した時には同寺の七面天女を氏神とすることと、新田1,000石を開いて供養することを誓いました。すると、富子の眼病が見事快癒したといわれています。義央は、感謝の気持ちとこの誓いを実行するため、1688年に新田の干拓にのりだし、10年の歳月をかけて面積90町歩（90ha）、収穫約1,000石の新田を誕生させました。富子の眼病の全快を神仏に感謝する気持ちから、この新田が造られたことにちなみ、この新田は「富好新田」と名づけられたといわれています。

現在の富好新田の様子
富好新田干拓の記念の桜が植樹され，奥には富好新田の水田が広がっている。

入浜式塩田空中写真（吉良町白浜新田）
塩田の区画が整然と配置されていることがわかる。

戦後まもないころの入浜式塩田（吉良町白浜新田）
右側に幅約１ｍの幹線の水路が走る。水路の手前側に海水の引入口が位置する。

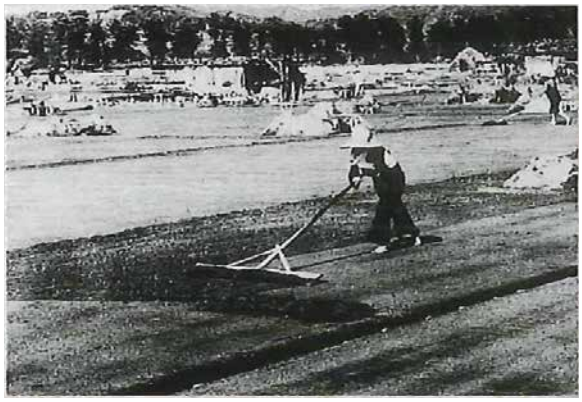
吉良の製塩業

吉良の製塩の歴史は古く、海水を煮詰めるために使った製塩土器が、古代の遺跡から出土しています。塩田による製塩がいつから始まったかは不明ですが、1590年に乙川（吉良町）の正法寺に塩田を寄進した古文書があり、戦国時代以前にさかのぼることがわかっています。

江戸時代になると、相次ぐ干拓事業が行われました。しかし、塩分濃度が高く、稲作に適していませんでした。そこで、新しくできた土地を利用し、塩田の区画が整然と配置された本格的な入浜式塩田の建設が行われ、製塩がさかんになりました。17世紀は、富好新田周辺の本浜と白浜で、大規模に塩が作られました。

吉良で作られた塩は、饗庭塩と呼ばれていました。饗庭塩は、にがり分が少なく、良質で、生産量も多く、岡崎の八丁味噌に使われたり、現在の長野県伊那谷方面にも出荷されたりしました。

しかし、明治時代になると、塩業整備によって数多くの塩田が廃止されました。そして、1971年には、塩田はすべて廃止されることになり、400年以上の歴史をもつ吉良の塩田による製塩の歴史は、幕を閉じました。



オシエブリを使っている様子（吉良町白浜新田）

カキエブリを使っている様子（吉良町吉田）

左写真は，オシエブリを使って，水分が蒸発して塩分のついた砂を帯状に集めている。その後，右写真のように，カキエブリで寄せてツボの中に入れる。（写真はいずれも1940年ごろのもの。）

太田松次郎（1863年～ 1886年）
個人蔵

鳥山利平（1852年～ 1893年）
西尾市岩瀬文庫蔵

杉浦善七（1849年～ 1900年）

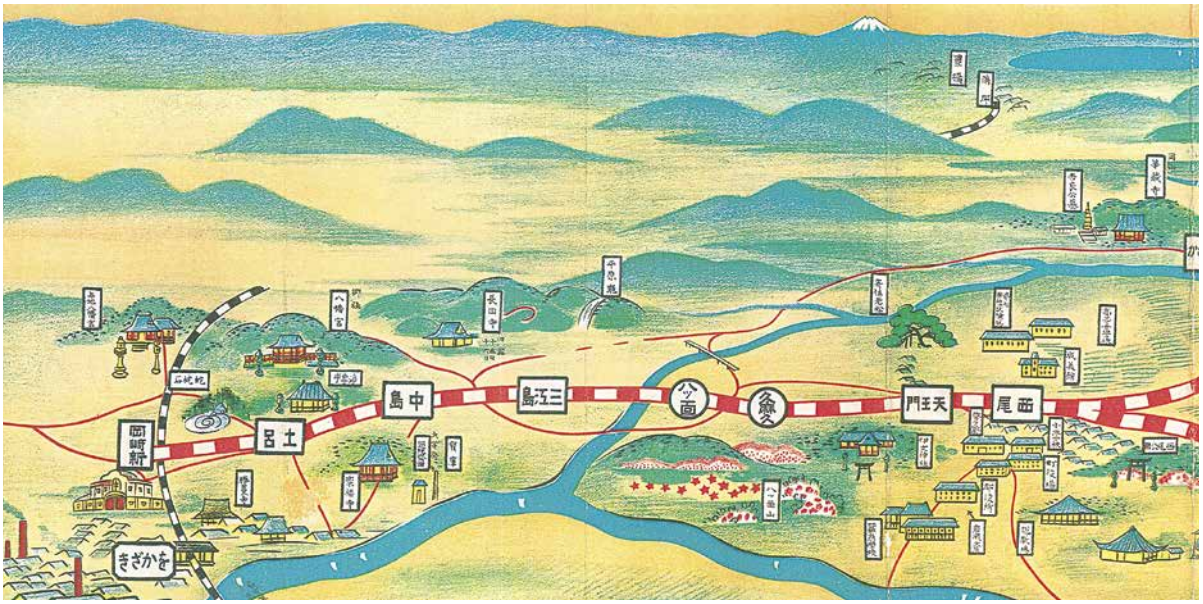
自由民権運動と西尾鉄道　―明治・大正時代の西尾―

西尾の自由民権運動の広がりとおとろえ

1882年、自由党総理の板垣退助が西尾へ来たことで、西尾での自由民権運動が大いに盛り上がり、康全寺で大演説会が開かれています。退助は、西尾で２泊し、その後、遊説先の岐阜県で刺客に襲われました。

当時、西尾には自由民権運動に参加している人物がたくさんおり、その多くは商人と剣術家でした。元西尾藩御用達の木綿問屋を営んでいた一色の太田松次郎は、同じく味噌たまりの醸造販売を営んでいた鳥山利平とともに、西尾における自由民権運動の中心人物でした。他には、剣術師範の安丸清、同じく書籍と文房具を販売していた杉浦善七らがいました。

1883年、鳥山・杉浦らは、太田の支援を受けて、伊文町に私立英語学校を設立しました。この当時、三河地方で英語を教える学校は、他には宝飯郡立宝飯中学校があるのみでした。この英語学校の目的は、英語を教えることのみでなく、英書によって新しい西洋の教養を身につけた社会人の養成を目的としたものでした。この学校の運営は、太田や鳥山の財力で支えられていましたが、太田が亡くなった翌年に廃校となりました。



矢作古川を渡る軽便鉄道
後ろに八ツ面山が見える。

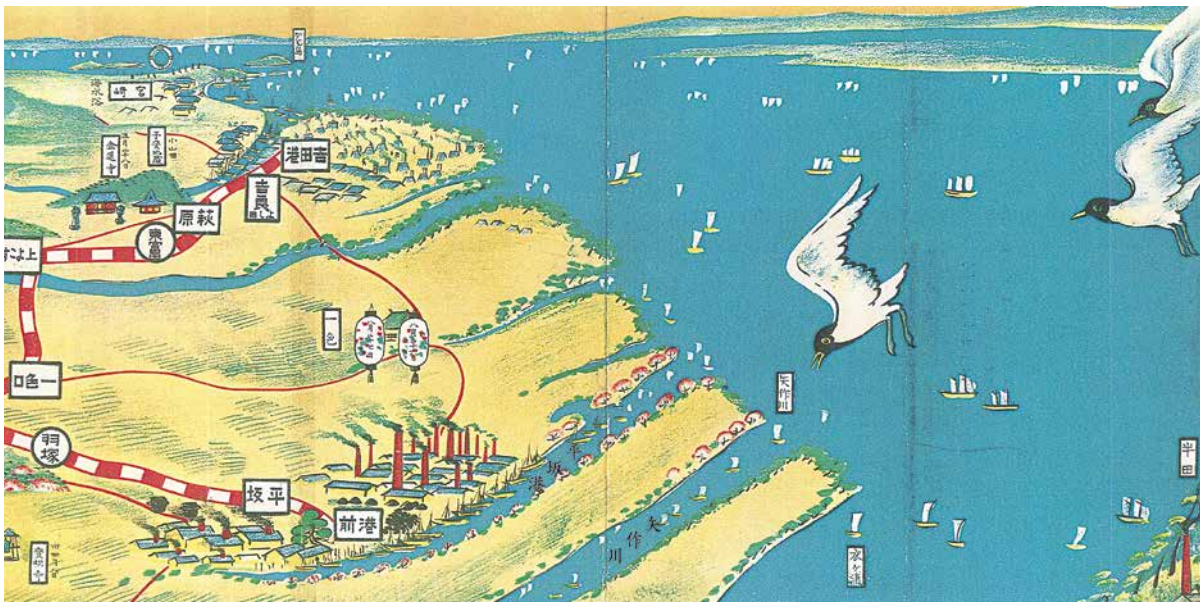
岩瀬弥助（1867年～ 1930年）
個人蔵

西尾の軽便鉄道開通

1911年、西尾鉄道は、現在の西尾市吾妻町（現在の吾妻町駐車場）にあった初代西尾駅から東海道線の岡崎駅に隣接して設置された岡崎新駅までを結ぶ鉄道として開業しました。西尾鉄道の初代社長は、岩瀬文庫の創設で有名な岩瀬弥助です。当初は全長13.3kmの路線に８駅が設置されました。ダイヤは、一日10往復、所要53分でした。それまで走っていた馬車に比べればとても便利になりました。

1914年には西尾から平坂、1915年には西尾から吉良吉田へと路線を延ばしていきました。これで西尾鉄道は西尾を中心に３路線が全通し、西尾―新岡崎間を岡崎線、西尾―吉田港間を吉田線、西尾―平坂港前間を平坂線と呼びました。第一次世界大戦による好況で貨物輸送も増え、西尾鉄道の業績も好調になりました。西尾鉄道は、沿線各地と東海道線、平坂港、吉田港を結ぶ小規模な産業鉄道として発展を続けました。

電化、改軌（鉄道における線路のレールの間隔を変更すること）工事にかかっていた1926年、西尾鉄道は、愛知電気鉄道（今の名鉄）と合併し、愛知電気鉄道の西尾線となりました。1928年には、現在の場所に西尾駅が移されました。



西尾鐵道案内
大正11年 西尾鐵道株式會社発行

深溝断層（額田郡幸田町）
現在も段差がそのまま残り、見ることができる。

三河地震と戦時中の生活　―戦時中の福地―

三河地震と西尾の被害

1945年１月13日の午前３時半ごろ、三河湾を震源とする大地震（三河地震）が起き、関東地方から四国地方まで揺れました。

この地震によって深溝断層と横須賀断層が生じています。地震断層が、西浦町（蒲郡市）から藤井町（安城市）にかけて走っており、西尾市内では、横須賀断層が、津平地区（吉良町）付近から三和地区を通り、志貴野町にまで走っていました。そのため、三和地区では震度７の激しい縦揺れを、地盤の緩い福地地区では震度７、西尾地区でも震度６の揺れを感じました。早朝で、ほとんどの人が布団の中だったので、建物倒壊による死者や負傷者がたくさん出ました。福地地区では、２２９人もの犠牲が出ました。福地北部小学校は、校舎が全壊したため、１週間も学校が休校となりました。

余震も続いていたので、傾いた家では寝ることができませんでした。瓦やガラスの破片が散乱した家に、ござなどを敷き、足を切らないように用心しながら、余震の合間に布団を外に出しました。畑や小屋で寝る生活は、３か月から半年近く続きました。

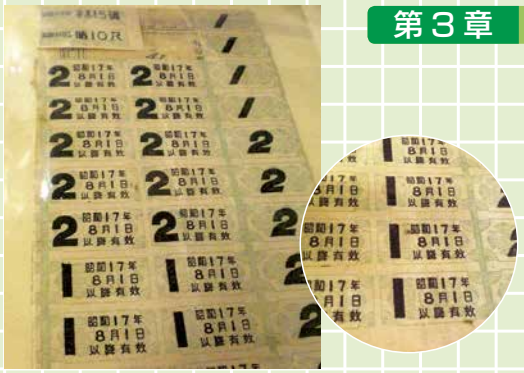
小島町・江原町・岡島町では、地震によって生じた高低がいくつもできました。小島竜宮社では、横方向に10cmほどずれた断層が今も残っています。

町村	世帯数（軒）	全壊（軒）		半壊（軒）		死傷者（人）		
		住家	非住家	住家	非住家	死者	重傷	軽傷
西尾町	4,422	760	1,070	1,880	2,070	175	85	265
平坂町	2,332	223	261	375	480	15	40	193
寺津町	1,128	130	260	650	380	57	23	300
福地村	1,226	455	850	不明	不明	229	80	216
三和村	952	544	491	543	685	196	70	189
室場村	406	77	27	170	17	18	25	25
米　津	426	152	141	159	137	53	10	66
南中根	86	41	35	35	50	22	1	7
合計	10,978	2,382	3,135	3,812以上	3,819以上	765	334	1,261

三河地震による旧西尾市の被害
『西尾市史』による

何よりも戦争の最中だったので、翌日の新聞には、地震に負けずに戦おうという論調の記事が出ました。物資も戦争優先でした。そのため、本格的な復興は、戦後から始まりました。

スフ製の国民服
人工絹という割に絹のような滑らかさはなく、表面がざらざらしていた。住所、氏名、血液型などを書いた名札をえりにぬいつけていた。
平坂小学校蔵



点数切符
点数切符制とは、自分の持ち分の点数切符（80点）が支給され、それを物（例：ズボン50点・国民服32点・靴下２点など）と交換するしくみである。写真に見える「1」「2」の数字が点数である。

戦時中の生活と空襲被害

1937年、日中戦争が始まりました。当初の予想以上に中国国内での抵抗が激しく、日中全面戦争に突入しました。そのため日本国内では軍需品の生産が優先され、国民の生活にも様々な規制が入り、生活も苦しくなっていきました。生活必需品でさえも少量の製造しか許されず、1939年、点数切符制となりました。これにより国民は、自由に欲しい物を手に入れることができなくなりました。当時の服装は、スフ製（人工絹）の国民服が基本であったため、ほとんどの人たちは、国民服と下着類に交換しました。戦況が苦しくなった1944年には、各自の持ち分が半分に減らされました。

主食の米も足りず、配給制でした。配給でもらえる米は、一日、おにぎり４個分ぐらいで、一日に必要なエネルギー量のおよそ６割分にしか相当しません。そのため、国民の大多数の人たちが、空腹、栄養失調の状態でした。農家は、空いた土地で作物を作るように指導されたり、他の作物から米への切り替えや保有米（米農家が家族の食べる分を手元に残しておく米のこと）を切り詰めたりするように強いられました。そのような中でも福地地区は、農家も多く、保有米や野菜があったため、多少ですが非農家の集まる町よりも食べ物に恵まれていました。

西尾市の空襲被害

1945年８月２日午後２時、アメリカ軍の飛行機が岡崎を攻撃後、住崎の田口航空を攻撃し、吉良方面へ飛んで行きました。その途中、現在の菱池町外河原の一般住宅に爆弾を落とし、死者１名、重傷者１名が出ました。アメリカ軍は、爆弾をすべて捨てて帰還していたため、この住宅が攻撃目標ではありませんでしたが、たまたま落とされてしまいました。このころは、アメリカ軍飛行機が通るたびに空襲警報が出され、いつ爆弾が落ちてくるのか心配で、安心して暮らせませんでした。

うなぎに生餌を与える様子
当時は、養蚕業が盛んで、えさとされた蚕の蛹を充分に確保することができた。

明治時代から1960年代までの養鰻の様子
池の構造が不良であり、大雨が降ると、大量のうなぎが逃げてしまうことがあった。

地場産業の発展　―昭和時代の一色―

養鰻業のはじまり

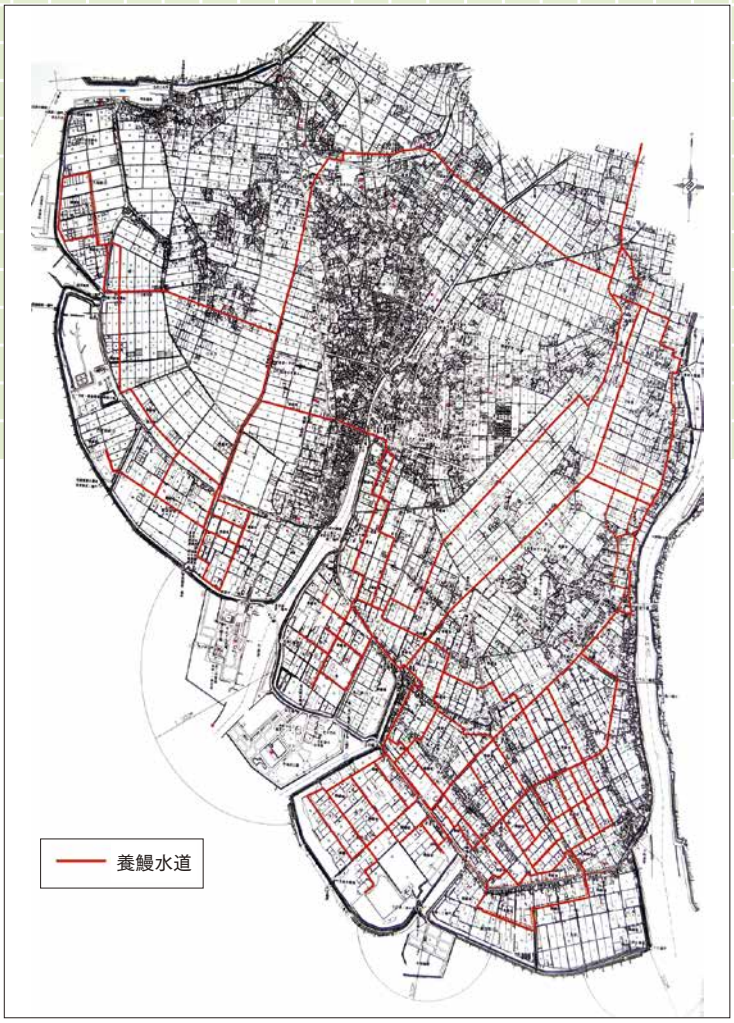
三河湾に面した一色町は、低地であり、水田は、潮風の影響を受け、作物があまりとれませんでした。このため、この低地を利用した養殖が考えられました。1894年には、坂田新田（一色町）に国内初の水産試験場が設置され、ぼらや鯉の養殖と一緒にうなぎの試験養殖が行われたことが一色町の養鰻業のはじまりといわれています。

1904年になると、竹生新田（一色町生田）で、徳倉六兵衛と徳倉広吉の両家が、12haの養鰻池を新しく造り、本格的な養鰻が行われました。その中で、養鰻に適した池の大きさや深さ、放養密度が明らかになってくると、大正時代・昭和時代の戦前を通じて養鰻業はますます発展し、多くの池が造られていきました。

転機となったのは、1953年に台風13号が水田にもたらした大きな被害でした。碧南・一色の海岸線は海水に浸ってしまい、水田としての利用が難しくなったのです。また、1959年の伊勢湾台風による被害も大きく、農地転用に迫られました。そこで、農地を池にし、養鰻業へと転職をはかる人々が増えていきました。最大時には、270名になるほど養鰻に携わる人々が増え、日本有数のうなぎ産地へと発展していきました。

1960年代以降広まったハウス養殖
酸素を送り込むため、常に水車が回っている。停電すると、うなぎが全滅することもある。

配合飼料を食べるうなぎ
魚粉を主体とした配合飼料を水と魚油で練ったもの。



養殖したうなぎを海に放流している様子

市場に出荷したうなぎの冥福を祈るとともに、資源保護や養鰻業の発展を願って毎年行われている。

養鰻水道の配管図

矢作川の水を取り入れることが可能になり、自然の中と同じような環境で、うなぎを生育させることができるようになった。

養鰻業の発展

伊勢湾台風後に広まった養鰻池は、農業用水を使用していました。農業用水には、農薬や家庭排水が混ざっており、その水質がうなぎに大きな影響を与えていました。また、えさについては、蚕の蛹や蒸し魚などの生餌を使用しており、効率が悪いうえに、水の汚れにもつながっていました。

そこで、水の改善を図ろうと県に申請し、1963年に養鰻水道を設置することが実現しました。水質の心配がなくなるとともに、水を安定して供給できるようになり、養鰻業が大きく発展することになりました。これだけの規模の養鰻水道は、今なお、どの地域にも見られず、一色町の養鰻業を支える大きな役割を担っています。

また、えさの開発も進められ、1965年には魚粉による配合飼料へと変化しました。えさを与えることが容易になり、うなぎの成長を促すことになりました。

さらに、露地池からハウス養殖へと養殖の仕方が変化し、うなぎが病気にかかる心配も減り、管理のしやすい、安定した養殖が可能になりました。

しかし、現在では、うなぎの稚魚であるしらすうなぎの減少が著しく、価格の高騰が大きな問題となっています。そのような状況にも、国内産にこだわり、地域ブランド「一色産うなぎ」を守る努力が続けられています。